「底が突き抜けた」時代の歩き方 103

もはや　自分にも倚りかからず

茨木のり子の詩集『倚りかからず』は、発売されてすぐに評判になり、昨年末から新聞、雑誌等で取り上げられて、現代詩の詩集としては異例のベストセラーとなった。なかでも表題作「倚りかからず」が注目され、話題を呼んだ。詩の全行は次のようなものである。

もはや
できあいの思想には倚りかかりたくない
もはや
できあいの宗教には倚りかかりたくない
もはや
できあいの学問には倚りかかりたくない
もはや
いかなる権威にも倚りかかりたくはない
ながく生きて
心底学んだのはそれぐらい
じぶんの耳目
じぶんの二本足のみで立っていて
なに不都合のことやある

倚りかかるとすれば
それは
椅子の背もたれだけ

凛(りん)として潔く、格好良くはないか。この詩は平明で、一目読めばだれでも引き寄せられる、断固たる姿勢がそこにはかたちづくられている。現代詩作家の荒川洋治が『週刊朝日』（９９．１２．３）で批評を行っているが、そのなかに、「〈精神の背骨が、ぴんと伸びている〉（天声人語）、〈「いま」詩を書くことの意味を書くことで、この時代を熱く生きている〉（毎日新聞・書評）、〈茨木さんの言葉は、どこにも、だれにも、倚りかかっていないなあ、といまさらながら思う〉（ちくま・書評）と言った言葉」が披瀝されている。当然の反応が示されている気がするが、それにしても詩というものがこれほ

ど好意的に受けとめられることに、却って不安を覚えることはないか。
　この詩「倚りかからず」に尋ねてみよう。あまりにも好意的な批評の続出に戸惑いはないか。いかなる（好意的な）批評にも「倚りかかりたくはない」、肝心な一行が詩から抜け落ちているために、この詩は誰にも疑問の余地なく受け入れられているのではないか。抜け落ちている決定的な一行、それは「できあいの自分にも倚りかかりたくない」ではないか。できあいの思想、宗教、学問、権威と続くなら、最後はどうしても自分自身に突き入らざるをえなくなるではないか。「自分自身」を詩が孕むことによって、批評は手放しにはならず、讃辞を呈する無数の「自分自身」が問い返される構造を持つことになるのではないか。
「じぶんの耳目／じぶんの二本足のみで立ってい」る基盤そのものをも問うことがなければ、詩が読者を批評し返す眼を内在することはない。だから、詩は「なに不都合のことやある」と泰然とするのではなく、「不都合」を孕まなくてはならないのである。そうでなければ、「倚りかかるとすれば／それは」、「椅子の背もたれ」と「自分自身」だけ、ということになるだろう。
「この詩集をさらに『いい詩集』にしているのは、自分の詩集を人間の書くものとしてとても『いい詩集』であると理解する読者の存在を疑ったことがないところにある。読めばすぐに意味が伝わり、たちどころに『倫理的な効果』をあげてしまう自分の詩のしくみに著者は『倚りかか』ろうとする。だから読み終えたときに奇妙な味わいが残る。『いい詩集』というものはいつもこのようなところがあるものだ。このようなものなしには生きられないのだ。
　いまは『背もたれだけ』というがほんとうなのか。きれいごとではないのか。著者は自分という一個の人間の現場で起きているであろうことにふれないまま（あるいは気づこうとしないまま）いささか現実離れした人間像を言葉のなかに、ゆらめかせる。人間がうたわれているのに、自分がいない。そこに独特の世界があらわれる。
　傷がないので、きれいだ。まっすぐだ。『いい詩集』である。著者は『いい詩集』から脱却することはないだろう。なぜならこの詩人は社会に文句をつけても自分とたたかうことはしないのだから。この倫理的な閉塞感がこの詩集の個性である。それは読者をゆたかにする。まずしくもする。」
　これは、荒川洋治の評言である。彼も私も、「いい詩集」だけの詩にほんの少しの毒を盛り込みたいのだ。

２０００年９月１６日記